

公益財団法人



## すみりんニュース No.22

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
 ■編集発行人 理事長 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21  
 TEL06-6674-3732 FAX06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

## この号の内容

- 1 『全国水平社90年の運動から学ぶ 12月例会』(1)～(13)
- 2 公益財団法人住吉隣保事業推進協会の動き(14)

## 全国水平社90年の歴史に学ぶ

## 住吉地区連続講座 12月例会

## 「パネルトーク どうする!？」

## 住吉の解放運動

## パネラー

梶川田鶴子さん(住吉誠友老人会連合書記)、西村隆英さん(住吉人権協会事務局長/医療法人ハートフリーやすらぎ)、村田進さん(社会福祉法人ライフサポート協会常務理事)、砂子多代さん(大阪市教職員組合西部支部支部長)、友永健吾さん(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部書記長)

昨年12月23(日)午後1時から3時すぎまで、市民交流センターすみよし北において、「全国水平社90年の歴史から学ぶ」住吉地区連続講座の12月例会(最終回)が開催されました。テーマは、「パネルトーク どうする!？住吉の解放運動」で、パネラーは、梶川田鶴子さん(住吉誠友老人会連合書記)、西村隆英さん(住吉人権協会事務局長/医療法人ハートフリーやすらぎ)、村田進さん(社会福祉法人ライフサポート協会常務理事)、砂子多代さん(大阪市教職員組合西部支部支部長)、友永健吾さん(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部書記長)の5名でした。進行は、村田望さん(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部執行委員)で、5名のパネラーからの発言のうち、参加者からも積極的な意見が出され、最後に、5名のパネラーからの一言がありました。

この日の参加者は27名でした。以下は、この日のパネラーの発言と参加者の発言を中心に事務局でまとめたものです。

村田望(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部執行委員)

全国水平社の歴史から学ぶ連続学習会の最終となります。今年4月から、毎月1回定例で「全国水平社90年の歴史から学ぶ」ということで行ってきました。今回が最後です。今日は、「パネルトーク どうする!？住吉の解放運動」ということで、住吉にゆかりのある方々から、住吉の解放運動について期待すること、あるいはこれまでの活動を振り返って、という内容でお話をさせていただこうと思います。

では、最初に、主催者代表として友永健三さんにごあいさつをしていただきたいと思います。よろしく願います。

友永健三さん(公益財団法人住吉隣保事業推進協会理事長)

去年は財団ができて50年、住田さんの生誕100年ということで、記念の集会と冊子を作って、住吉のこれからの解放運動に役立てようということで取り組みをしたんですけども、今年も全国水平社ができて90年ということもありますので、90年の運動の中から学んでいこうということで、4月に作家の高山文彦さんに来ていただき、大きな集会をしました。それ以降、月1回、水平社宣言、戦前の水平社の運動、戦後の運動も二つの時期に分けて学習会を積み重ねてきました。たんに学習をするだけでなく、フィールドワークもしようということで、水平社博物館に行きました。

今日は、その締めくくりということで、これからの住吉の運動をどうするのか、ということで議論をさせていただきますが、みなさん、ご存じのように市民交流センターが存続するかどうかは、来年の住吉の運動の最大の課題になると思います。あるいは、新しい町づくりをどうしていくかという議論も始まっています。若い人たちの仕事をどのように保障していくのか、ということも大きな課題になっています。そういったこともこれからみなさん方から提起していただけたらと思います。私も楽しみにしています。

総選挙の結果は、みなさん御存じのように自民党が圧勝する結果で終わりました。朝日新聞の記事などを見ますと、集団的安全保障に賛成の議員が8割を超えている、憲法改正に賛成の議員が9割に及ぶ、というように書かれていますが、非常に危ない、右に偏った政権が生まれます。しかし、こんなときだからこそ、地域にしっかりと根を張った運動をしていくことが大事ではないかと思えます。できれば、平和、人権の課題についても、議論していただきたいと思えます。

実行委員会をつくり、4月から今日で9回目、毎月行ってきました。参加者は限られていましたけども、ニュースを作っています。財団の「すみりんニュース」というところに、どういう報告があったか、どういう議論があったか、載せていますし、インターネットの財団法人のウェブサイトで、そのニュースを見ることができます。学習会に参加できなかった人たちも、ぜひとも、それを読んでいただきたいと思えます。では、よろしくをお願いします。

村田望さん(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部執行委員)

それでは、「パネルトーク どうする!? 住吉の解放運動」をテーマに、5名の方から発言をいただきますが、まず最初に梶川さんよろしくをお願いします。

梶川田鶴子さん(住吉誠友老人会連合書記)  
「子育てと教育運動に関わって」

レジュメに誠友老人会連合書記と紹介されていますが、私は小学校4年生までしか学校に行っていない。今は水曜日に識字の勉強をしています。子育てのときは、保育から始まったんです。解放運動の始まりは教育から、揺りかごから墓場まで、という大川さんの例えがあるように、私は28歳で結婚して、子どもができてから、初めてこの子のためにやらないかと思って、始めたのが解放運動です。

最初、私の主人の兄さんが解放運動をやり、住吉支部を6人から始めました。それで、私らもやらない

とアカンのんと違うかということで、入ったのが28歳。今年で50年。いろんな行事に参加して、自分の勉強だと思って、今までやってきたんですが、アツという間に50年です。石川一雄くんの問題は石川くん一人の問題じゃない。司法権力に対しての闘いだということで勉強して、保育所の子どもにもゼッケン付けて、小学校と中学校の登校のときにピラ配りして、給食値上げ反対運動とか、いろいろやってきたなかで、これからの解放運動もそうだけど、教育が一番大事だと思えます。私は、毎日が勉強だと思って、生きてきたんですけど、子どもには、しっかりと教育を付けないといかん。前は特就費(と奨学資金)があったから、高校も出せたし、大学へ行った子もある。やっぱり特就費(と奨学資金)があったから、ここまで来たん違うかと今は思います。特就費を打ち切られたから、これからの解放運動は、子どもに教育をつけて、仕事もないけど、これからの子どもはどないして生きていくんか、一番の心配はそれです。そのためにも、私らは、老人ですけど、体に鞭を打って、次の時代の子に教育つける。教育をつけたら、解放運動のしていることがわかる。

私らは、どこへ行っても、差別の言葉が出たりしたら、メモしないといかん。それ一本で、(保育父母の会ふくむ)PTA行って15年、そのなかで学級委員、立候補しなさいって、小川の英ちゃんと白井くんに言われて、立候補して、学級委員に立候補した。字もわからなくても、しゃべれたらいいんやって言われて、学級委員に立候補したり、先生に助けてもらったり、いろいろやってきました。毎日が勉強やと思って、やってるんです。今後、支部にお願いやけど、特就費(と奨学資金)、打ち切られたら学校も行けない子どももまだいると思うから、支部に特就費がわりに貸してもらって、その子が学校出たら返していく、ということもやっていってほしいと思えます。

村田望

次に、西村さんをお願いします。

西村隆英さん(住吉人権協会事務局長/医療法人ハートフリーやすらぎ)

人権協会の事務局長を長い間やらせていただきましたが、そのまえには支部の書記次長を10年ほどさせてもらいましたので、運動のことということで話をしていきたいと思えます。

住吉のまちづくりの始まりというのは、今はもうありませんけど、1号館、2号館、3号館の市営住宅の建設から始まっていると思えます。これは、あまりにも劣悪な中で昭和30年代の後半に、地域の住環境

をどうかしてほしいという住民の願い、そこで先進的な支部が、西成支部、浪速支部で、住宅が建設されたということで、われわれの町も、住宅が困窮しているの、住宅を建てようというかたちです。

大阪市内には、同和地区と呼ばれている所が12地区ありますけども、当時、大阪市で、一番劣悪な地域は生江と住吉だったらしいです。今あります団地が建ってるあたりの3分の2ぐらい、上住吉はもちろん地区外ですし、17号館も完全に地区外ですし、12から16号館の半分は地区外です。総セン(総合福祉センター)を囲むあたりですね、ここ(市民交流センター)も地区外です。隣の6,7号館も摂津酒造という地区外ですから、非常に狭い地域の中に、人口で言えば、その当時から比べると増えてますけども、世帯数も多かったです。総合計画が完成して、それ以前と比べると、変わったとしても世帯数で言えば1.5倍ぐらいですかね。ですから、なかなか総合計画は進みませんでしたので、現在の支部長の前田さんとか私とかを含めて、この地区には住めないということで、総合計画ができるまで4キロ離れた住之江区に集団移転せざるを得なかったという歴史もありました。

まちづくりのなかで、まず1号館から3号館が建ったんですけど、そのあと、解放運動の大きな成果として、財団法人住吉隣保館が建ったわけです。私が生まれたきっかけも、その財団法人住吉隣保館を私の父親が大工で建設しに来て、母親がその職員で、出会う、私が生まれたんです。だから、財団法人の50周年と私の50歳は同じ年なんです。出来上がったのは1960年ですけど。解放運動をまず初めに進めてきたのは、この財団法人の設立やと思います。



そのあと、まちづくりでどんどん住宅が建設されていきますけども、そのなかでできたのが青少年会館、総合福祉センターです。その総合福祉センターが建設されたのが1986年、そしてハートフリーの前

身である住吉診療所が1986年に総合福祉センターと同時に開設されます。この診療所は今みたいに大きくなかった。北側の旧館の2階の一部に、いまのジラフのあるところが診療所だったんです。すごく狭い所でした。

最初、診療所はいらないんじゃないかって地域の中で言われたんです。大阪府立病院もあるし、阪和病院もあるし、周りに医院もあるし、必要なかなあって言われたんですけど、しかし、往診に来てもらうっていうと、なかなか地域に入ってきてもらえないというようなことがあるので、最初は、人権文化センター(当時は解放会館)の1階で、眼科を始めた。なぜ眼科かというと、同和地区はトラコーマがすごく流行ったんです。不潔なタオルを一家で使うので、一人が罹ると、みんなトラコーマになっていったんです。いま、そんなことはありませんけど。当時は、眼科の予防ということで、まず眼科が開設されました。

その後、介護保険が導入されて、1999年に福祉法人ライフサポート協会が開設されました。その開設は1000万円で、支部と当時の地区協が500万円ずつ出資して、福祉法人を設立しました。戻りますけど、1986年の診療所の開設にあたっては、今の人権協会、昔の住吉地区協議会が直営で診療所を設立したという経過がありますが、いつか、福寿会診療所のほうに業務委託をして、診療所を任せたとありますが、途中1999年に、住吉地区協議会の直営になって、2003年夏に、医療法人ハートフリーやすらぎを設立、2004年の1月から、当時の人権協会から、医療法人に設備とか物も全部含めて出資、医療法人に無償貸与というかたちで全部の資産を貸したという経緯があります。

そういうことで、今日を迎えるわけですけども、診療所がもうすぐ医療法人の設立から10周年を迎えますけども、財団法人から始まって、福祉法人の設立、医療法人の設立、そのほかにNPO法人も設立しています。保健医療に関しては、すごく先進的な地域だと思います。それはなぜかと言ったら、どれだけ支部が、地域住民の福祉を考えてきたか、そのなかで必要に応じて、いろんな法人を作ってきたということが言えるのではないかと思います。この間、市民交流センターすみよし北が、大阪市の橋下市長により、潰されようとしています。このことに関しては、行政責任を求めていかなければならないと思いますけども、私は、この運動の起こりである隣保事業というのは、すごく大事だと思います。行政が何と言おうと、やはり地域でそういう法人をつくってきたわけですから、これからの解放運動としては、隣保事業を大事にしていくというのが、ひとつの道筋ではないか

なということを、私からの提言をさせていただきたい  
と思います。

村田望

ありがとうございました。それでは、次に村田進さん  
をお願いします。

村田進さん(社会福祉法人ライフサポート協会常  
務理事)

「これからの部落解放運動の在り方を考える  
～住吉地区を中心に～」

私は、大学3年のときから、上田卓三さんが参議  
院議員選挙に出るといので、それに学生の立場か  
ら参加しようということがきっかけで住吉に出入りす  
るようになりました。卒業してから隣保館の職員にな  
って、2003年にライフサポート協会に移るまで、ず  
っと法人の職員で、支部のほうでもやらしてもらいま  
した。梶川明さんの所にはほんとうにお世話になりま  
した。最初に来たとき服がなくて、梶川さんとか野村君  
一さんによく服をもらいました。それで生活をしてい  
たということを思い出します。そういう意味では、幅広  
く解放運動と関わりがあるんですけども、時間が限ら  
れているので、レジュメにある程度まとめてきまし  
た。さきほど、梶川さん、西村さんのほうから部落の  
思いとか歴史についてお話をされたと思うんですけ  
ども、私は社会福祉法人という立場もありますので、  
そういう切り口から、部落解放運動との関わり、ある  
いはこれからの解放運動の課題について考えてみた  
いと思います。

まず、福祉法人の設立は1999年。それまでは同  
和対策で福祉をしていたんです。たとえば、大阪市  
の一般対策のヘルパー制度を、同和対策としてつく  
られました。社会福祉協議会(社協)と別に、同和地  
区だけヘルパー制度があったんです。途中で、部落



だけではなく、周辺にも困っているお年寄りがいると  
いうことで、外にも出ていこうという取り組みをしてい  
ました。総合福祉センターをつくって、地域の福祉を  
していたんですが、特別対策をいつまでもやってられ  
ない、同和対策法期限切れの店じまいという話が出  
てくるなかで、一般対策を活用して今までやってきた  
福祉を発展させないといけないということになりました。  
ちょうど目の前に介護保険制度創設がありましたから、  
介護保険事業を誰がするのか、そのためには社会福祉  
法人が必要だといので、社会福祉法人を設立したとい  
う経緯があります。つまり、一般対策を活用した福祉  
活動を同和地域や周辺地域でやっていこうというこ  
とで設立されたんです。

いざ、やりだしてみると、同和対策でヘルパーが地  
域外に行くときにもあったことですが、一般法人にな  
っても同じことが起こったんです。つまり、ヘルパーさ  
んが行ったとき、「あんた、どこから来るの?」「駅の  
向こうから」「あつ、そう。じゃあ、これからは……」  
という話が出てきます。うちのデイサービスの職員が、  
行く場合にでも、「どこから来るの?」「駅の向こうか  
ら」「悪いけど、車、止めるの向こうの角に止めてくれ  
へん。うちの前に来んといほしいねん」、こういう露  
骨な差別意識が普通にありました。設立のときに、  
職員を何人が採用したときに、あるデイサービス担  
当の女性職員が突然来ないようになったんです。理  
由を聞いてみたら、「私、ここが同和地区やということ  
を知りませんでした。採用のときに、説明を聞いてな  
い。私、間違われたらいかんから」。こういうことが職  
員採用のなかでも起こったんです。非常に差別の雰  
囲気の強いなかで、われわれは社会福祉法人を立ち  
上げて進めていったんです。

うちの法人の理念は「人権社会の確立」ということ  
で、すべての人が、その人らしく、地域で暮らせるよ  
うに支えることと、地域社会全体をそういう社会に変  
えていこうということを目指して活動をしてきたん  
です。つまり、法人の理念に沿って、われわれのサー  
ビスは、目の前の障害者であれ、認知症を抱えてい  
る方であれ、一人の人として、その人を支えるとい  
ことをしっかりとやっていこうということに積み上げ  
てきたんです。さきほど言いましたような厳しい地域  
の状況の中で、このような人権の立場から、一人の人  
として、その目の前の人を支えるという実践を積み  
上げてくるなかで、徐々に偏見がなくなっていくた  
というのが事実なんです。

地域との連携で言いますと、在宅介護支援セン  
ターが最初からありまして、この活動で、どんどん外  
に出ていって、一番困っている人に対して、サポート  
を積み上げていったということです。そして、デイサー

ビスとかヘルパーでも、ほんとうにありがたいと思ってもらえるような支援をずっと積み上げていきました。今では、地区の社協や連合町会が、法人の役員や、評議委員、理事になってもらっています。そして、積極的に出ていって交流をしています。地域包括支援センターも開設していますが、これも相談活動をずっとして、いまや、意識がかなり変わりまして、ライフサポートがあるおかげで助かっているという声が自然にわいてきています。そういう意味では、社会福祉法人ライフサポート協会は一般対策を活用した社会福祉事業所として立ち上がりましたが、そこには部落の法人ということをし、しっかりと引っ張りながら、負い目と感ずるのではなしに、それを前に打ち出しながら、理念だけではなしに、目の前の人を大切にするという活動を通じて、偏見を打ち破ってきたと思います。

レジュメの2番目の「今日の部落解放運動の停滞の要因は何か？」というの、また時間があればやりたいと思います。3番目の「これからの解放運動の在り方」というものを考えた場合に、住吉の歴史、とくに隣保館、ここからスタートですね。そして、大きなまちづくり運動をやって、今日に至っています。いまだ根強い差別偏見はありますが、市民交流センターや法人の運営についても、連合町会とか社協の会長が参画してもらっているというところまで、全体の雰囲気が変わってきたんですね。それは、この間の解放運動、まちづくり運動の大きな成果じゃないかと思えます。ただ、全体の雰囲気は変わってきているんですが、地域の中が、解放運動自体がどうなのかが、今日のテーマになるぐらいですから、自ら問うていかねばならない実態があるということにはまちがいないことです。

逆にいえば、なぜ、停滞しているのか。私は、原点をもう一度見るべきじゃないかと思えます。住吉の解放運動の原点は、やっぱり隣保館活動にあったんじゃないかと思えます。住田利雄さんが最先頭で走りながら、つくり上げてきたことですが、とくに授産場と子ども会と発足した1955年から1969年の天野市議糾弾闘争までの過程というのは、ほんとうにすばらしい、人が変わっていく歴史じゃなかったかなあと思えます。途中で、隣保館の竣工という大きな柱があるんですが、この流れというのは、これは社会福祉のなかでも特に言われるんですけども、「気づき⇒共有化⇒変革への試み」を住民とともに歩んだ時代と言えるんじゃないでしょうか。つまり、圧倒的な差別の意識、差別社会の構造の中で、部落の人がそれを変えるというようなことは、夢にも思えないような厳しい実態があったことは間違いありません。そ

の厳しい実態を、自分のせい、親のせい、ここに生まれた運命だと、あきらめるのではなく、この厳しい事態が社会によってつくられたものであるということ、そして自らの希望のある生活は、つかみ取ることができるといふことを、まず覚醒する、自覚する、気づく、そういう過程を一番最初に取り組んだのが、この隣保館を中心にした活動ではなかったのかと思います。そのことを単に個人が思うだけじゃなしに、隣の人も、隣のお爺さんもみんな一緒やねんと、共感していて、共有化していく、この地域、みんな同じやというふうに感じていく過程の中で団結が強まって、ムラ全体を変えていこうという新しい変革への意欲を醸し出していったのではなかったのか。それが、最終的に、天野市議糾弾闘争というかたちで、町内の同和会と言われる保守的なグループと対決して、解放同盟として立ち上がっていく、そういう大きな変革の過程じゃなかったかなと思います。ここをしっかりと踏まえるということが、これからの運動にとって、大事なことじゃないかなあと思えます。

二つ目は、住吉では、住民を支える地域の力が十分存在します。このことは西村さんも言われましたように、必要に応じて法人をつくってきました。法人だけじゃなしに、初期の解放運動を担ってきた老人会、梶川さんが象徴的に前に座っておられますが、今の住吉は、本当に老人会のパワーってすごい。なぜ、老人会のパワーがすごいのか。人間、変わったら、自覚したら、強いんです。言われてやるのではなく、ほんとうに腹の底から変わるという経験をした人は強い。それが、この老人会に表れているんじゃないかと思えます。第2、第3の老人会のようなグループをどうつくるかというのは大事なことです。これが一つ。

それから自治会があります。これは小住町会長を先頭に活動をされているんですが、この自治会、一般の地域の自治会と比べると、しっかりしてると思えます。自治会だけでなしに、地域の雰囲気も、困っている人には、「どうしたんや？」と声かけが自然とできるような地域です。その財産があります。ハードでいいますと、市民交流センター、総合福祉センター、診療所、そして、福祉法人、医療法人、こういう力を、どう最大限、活用するかということが課題だと思います。社会福祉の視点ということで考えますと、三つほどあります。一つは、制度化というのは、枠内化と隙間を生むため、常に新しいニーズに対応していく必要がある。何かというと、なんでも、制度を取るまでは熱心なんです。これがほしいという思いで一生懸命やるわけです。実現すると、途端に風化が起こる。考え方が、その制度の枠の中で考えようとしてしま

う、やってきた人間は。もう一つは、制度で何でもカバーできないんです。必ず制度の隙間が生まれる。落ちこぼれる人が出てくる。制度を勝ち取ったとしても、100パーセントのものを勝ち取れるはずがない。どこか一部、必ず抜け落ちている。その抜け落ちているということ、たえず意識しておかないと、なんでも、この枠の中でやっていこうとしたら無理が生じる。同和対策事業、まさにそれでしたね。ウルトラCってやりだすんです。制度にのっていないことまでやろうとする。それが極端な話、利権とか言われるような誤解を生むようなことになるんですね。ですから、制度というものは、勝ち取らないといけなけれども、それは絶えず逆の側面を持つてから、制度の隙間に落ちた人を意識して、絶えず新しいニーズに対応して、取り組まないといけなと思います。

それと、援助の視点を援助する側ではなく、援助を必要としている本人の側に置く視点。これは、本人主体ということです。住吉の相談活動というのは評価するんですが、しかし、これまでやってきた相談活動というものが、ほんとうにその人の立場に立っていたか。ともすれば、こちらの側の視点、援助する側の視点で、相談してなかったか。何より指導をするという観点が強すぎなかったのか。たとえば、仕事に行けてないとか、あるいは家に引きこもっている場合に、家庭での親の育て方が悪いのではないかとか、本人の意欲が少ないのではないかとか。少ないから家に引きこもっているんです。意欲の少ない子を、どう意欲的にするかということです。それは上から怒ってもダメです。本人の立場に立たないとダメです。一番最初にしないといけなことは、本人が今の引きこもっている状況をどう思っているのか、そこからスタートなんです。本人の思いからスタートさせる、これが二つ目に大事なことでないかと思います。

三つめは、本人の問題に対応するのではなくて、本人の生活全体をとらえる視点、これは解放運動が行ってきたことだと思います。縦割り行政を総合的な相談というかたちで取り組んできた。ここは引き続き大事な視点ではないかと思います。

そこで、二つだけ、提起をしたいと思います。まずは、住民の個別のニーズにしっかり取り組むところから始める必要があると思います。解放運動、やること、がいっぱいあります。主体的力量とは別に、期待されることが大変大きいから。あれもしないといけな、これもしないといけな、というふうに出てきますが、私は、再生させるためには、まず、支部員、地域の住民、一人ひとりが、目の前の人をしっかりと見て、話しこんで、その人を支え続けるところから、その過程が、さきほど原点とありました隣保館活動の

ように、本人に気づき、周りと共に共有化して、変えていこうという変革の試みに発展するような実践の一つでも、二つでも、積み上げることが、解放運動を変えることになるのではないかと思います。

最後に、まちづくりですが、ともすればハードに意識がいきます。でも、これはもう絶対に無理です。ハードではできない。どう住み続けることができるかというソフト、そこの視点が非常に大事だと思います。これは、残念ながら、今までやってきたリーダーの頭の中では、ほとんど無理です。わからない。もっと創造的な意見を聞くべきだと思います。執行部の一部の人間の力量を超えていると思います。しかし、一方では、これまで解放運動がやってきたなかで、外で頑張ってる人やさまざまなネットワークのなかに、いっぱい知恵を持っている人がいます。そういう人の知恵を集めるような“場づくり＝ラウンドテーブル”、フラットに話ができるような場をつくって、知恵を集めるというような作業を、今からやる必要があるんじゃないかなあとと思います。

村田望

ありがとうございました。それでは、砂子多代さん  
お願いします。

砂子多代さん(大阪市教職員組合西部支部支部長)

私自身がパネラーになったときに、どうなふうに自分を自己紹介しようかと、ずいぶん考えました。でも、村田進さんがはじめに「住吉に関わる人」って言っていただいたんで、私は、西部支部の支部長としてではなく、教員ですから、教育に関わる人間として、自分がどんな教育を受けてきたかを振り返って、今どんな教育をめざそうかということを考えてみたいと思います。

私が、小学校に入学したのが1961年(昭和36年)です。大阪で生まれて、大阪で育っているんですけども、父親の仕事の関係で、小学校1年生から6年生までは東京にいました。東京都といっても、練馬区立中町小学校といって、西は武蔵野に近く、北は埼玉に接しています。私がいた練馬区というのは、ホントに一面トウモロコシ畑と練馬大根があるというところ、そこで小学校生活を過ごしました。近くには関東練馬少年院がありました。狭山事件のことは覚えていますが、でも、当時は狭山事件とは言ってませんでした。小学校3年生のとき、1963年の3月の終わりに、吉展ちゃん誘拐殺人事件が起きて、犯人が見つからなかったというときから、わずか1カ月

後に埼玉県の高校生が誘拐されました。テレビでよつちゅうニュースに出てきました。そのことをものすごく覚えています。というのは、集団登校はしていましたが、小さな男の子が誘拐されたり、高校生みたいな大人の誘拐事件が起きたということで、急に大人たちが心配して、土曜日なんかは、今でいう見守り隊のように下校のときもついてくるというようなことがあったことを覚えています。それが、狭山事件だったということは、大阪に帰ってきてから知りました。1964年といえば、東京オリンピックで、私も日本の旗と、どこか応援団の少ない外国の旗を持って、応援に行くみたいな経験をしています。翌年の1965年は同対審答申が出た年ですね。これから経済復興をめざす日本のなかで、相変わらず被差別部落の実態が残っていたんだなあって今は思います。それから、6年生のとき、1966年に大阪に帰ってきました。その頃はまだ部落問題と出会っていないと思っている自分がずっとあったんですけど。

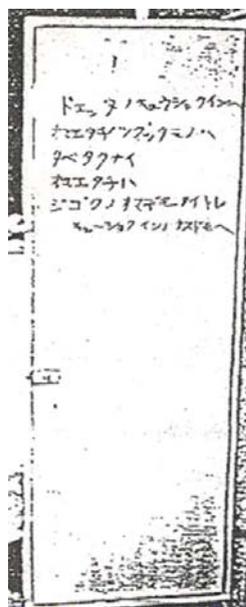
1969年、中学3年生のときに、今井正監督の「橋のない川」の映画を、中学校から映画会ということで、学年みんなで見に行ったんです。主人公の畑中孝二くんが手を握られたときに、彼女から「蛇のように冷たくなるんじゃないか」と言われ、傷ついていくところ、多感な時期でしたから、私の中ではとても強烈でした。でも、いつも先生たちは、すぐ感想文を書けっていうのに、めずらしく感想文を書けとは言わなかったです。書いて、いろんなこと質問されたら、困るからだったのかもしれないんですけど。でも、私の感想はそれだけだったんです。それまで見てきた戦国時代の映画とか江戸時代の映画と同じように、昔そんなことがあったんだと、という程度にしか記憶に残らなかったんだと思っています。

それから、1970年、高校生になって、3学期ぐらいのときに、自治会が制服自由化反対の学校集会をしました。同じ服を着て、同じ所にいて安心感を味わうとか、非行を起こさせないというのは間違いだと。動きやすく、肩のこらない服にすべきだという集会だったんです。そこで、在日韓国人と言ったか朝鮮人とやったか覚えてませんが、「コウと言います」「社会にはいっぱい規制があって、日本名を名乗らなければ、あるいは、日本国籍を取らない限り、税金を払っても、選挙権もないんです」「こうした社会のいろんな規制を打ち破るということが、これからの私たちの運動だと思う。だから制服はその一つです。スタートです」みたいなことを言われて、これも、今までの自分にはない強烈な印象だったんです。今でいう、イ・ボンホンみたいな精悍な格好をしてはったんです。すごいなあって。なんかわからないけど、今までにない、

自分にはない世界でした。住吉中学校からの卒業生で、高校が一緒だった同級生の一人が、「あんなに自分自身のことを全部さらけ出して、これからのことを語る人って、すごいことなのよ」って、私に言った人がいるんです。それはYさんだったんです。でも、私は、彼女のその言葉の意味が、その時点では深くはわかりませんでした。

大学に行ったのが1973年です。教育の免許を取るためには、必修科目として部落史や同和問題という必修講座がありました。私は、その講座を受けながら、自分自身の中でそういったことがつながってないまま、1977年に新規採用で教員になりました。そこで起こったことについては、あとから話をします。

7年経って、住吉小学校に1984年に転勤してきました。転勤してきて、忘れられなかったのは、7月18日、住吉小学校のトイレでの差別落書き事件です。



給食調理員さんに対する差別落書きだったんです。私にとっては、初めての糾弾会というか、確認会でしたけども、それぞれの責任を追及されたわけですが、私の中では、何が何だかホントのことをいって、わからなかったんです。そこで、「先生たちは信じられない」「差別された者しかわからない」って言われたときに、私は行っただけで、まだそのときは29か30になろうとする時期だったんですが、でも、「信用しない、信用できないって言わないでほしい」って。「『部落のことは部落の人にしかわからない』って言ったら、障害者のことは障害者のことにしかわからない、在日のことは在日にしかわからない、そんなふうに言ってたら、一緒にやっていけなくなってしまう」っていうふうなことをすごく思いました。

糾弾会のときに、私自身は、「誰も自分の生まれる場所や時を選べない、好きで、私はいまの立場にいるわけでもない」って言ったときに、すごく叱られました。好きでなったわけじゃないってこと、そのときは深い意味はわかりませんでしたけども、好きで生まれたことないってことは、自分のこの立場で生まれたことは、好きじゃない、誇りに思えないということなのかって、いう怒りで返されたんだと思うんですね。でも、それを理解するには、私自身は、もう少し時間があるんですけども。さきほど言った、Yさんと再会したのは、教育懇談会のときでした。そのときに

初めて、彼女が住吉で、母親として、そこに住んでるんだということがわかったときに、彼女にとって、あのときの私は、自分の立場を言えるだけの友だちではなかったからなんだということをすごく感じました。

そんななかで、初めて出会った生徒、当時2年生、8歳の子どもたちが20歳になったときに、女の子ばかりでしたけど、5、6人で話をしました。みんな、同じことを言いました。高校になったら、友だち同士の会話の中で、必ず部落のこととか在日のこととかを笑い物にするギャグがみんなの中で当たり前のように出てくる、そのときに、止めようと思っても、言えない自分があったりする、親しくなった友だちに、自分の部落出身のことを告げたら、「関係ないって、そんなん。友だちやから」って言うって言うんです。それは、言う相手を間違えたって思うと、異口同音にみんな言ったんです。私は、「どんなふうに言えば良かったんやろ」って聞いたたら、「関係ないことないやん。自分の友だちや、自分の好きな人が部落やったら、関係してくるやん」って。「わかれへんねんやったら、わかれへんでいいから、一緒に勉強したいって言ってほしかったなあ」って言われたんです。そのことも私にとっては、非常に大きな出来事でした。

私は、いま、改めて思ってるのは、私の卒業生のなかには結婚した人もいっぱいいますが、結婚は建前と本音が必ず交錯してくる場所ですから、そこを越えても次に行く部分というのはいっぱいあると思います。地域では教育はどうなってるねんって思うことはまだまだいっぱいあるかもしれません。解放教育が始まって40年過ぎですけども、部落のことを避けたり、関わりを持たずに過ごそうという人よりも、むしろ積極的に関わっていかう、関わりたいと思っている卒業生たちが少しずつ増えてきたということは事実です。私自身も教育されてきたし、教育と共に過ごしてきたという思いがしています。それで、これで十分だとは、思っていないんですが、解放運動の中で、積極的にムラに関わろうとする人たちが増えてきたことは事実だと思っています。

村田望

ありがとうございました。それでは、最後に友永健吾さん、よろしくお願いします。

友永健吾さん(部落解放同盟大阪府連合会住吉支部書記長)

今回、私が話をさせていただくのは、1点目は、解放同盟は、部落差別とどう闘っていくのか、どう向き合っていくのか、その点について、話をしたいと思います。まず、部落差別をどうとらえていくのか、どう立

ち向かっていくのか、この点については、前々回のこの講座のときに、部落解放同盟大阪府連の赤井書記長が、差別の現れ方には四つのパターンがあるという話をされました。攻撃、排除、忌避、無視です。今日、まだ部落差別があるのかないのか、あるとすればどんな差別があるのかということ、特徴的なものを紹介します。

ひとつは、土地差別調査事件です。これは、土地の売買にあたって、どここの土地はこういう問題があるから、安く売らないと売れないとか、そういうリサーチをする会社があります。最近、それが発覚して、この住吉地区も、市民交流センターや青少年会館などがあるなどの理由で、低いランクに位置づけられていました。

ふたつは、戸籍不正入手事件です。これは、たとえば結婚の際、相手の出自がどこかというのを調べるために、自分が知らないところで、戸籍が勝手に取られている。誰でも取れるというような簡単なものじゃないんですけども、たとえば、司法書士とか、弁護士とか、特定の業種の人は取ることができるんです。それを利用して相手の身元を調べる。調べて、相手が部落の出身者だったら、結婚を反対されるというようなことが、今でもあります。

みつつは、インターネット上の差別事件です。インターネットでは、ひどい書き込みから、いろいろあります。最近では、どこが被差別部落なのかというのを知りたいと思えば、たとえば「大阪の被差別部落」を検索すると、住吉地区も出てくるんですよ。こういうことがインターネット上で、まかり通っているというのが現状です。

よつつめは、『週刊朝日』の2012年10月26日号に、「ハシタ 奴の正体」というタイトルの記事が掲載されました。これは、橋下市長の出自を暴くという内容の記事でした。記事の中で、橋下市長と被差別部落についての関係について書かれてあり、被差別部落について、差別や偏見を招くような内容が書かれていました。そういった質の低い文章を、週刊誌を売りたいがために、センセーショナルな見出しを使って、売ろうとした事件があったんです。橋下さんは力があるから、親会社の朝日新聞社に抗議したところ、その連載は打ち切りになり、謝罪文が出されました。しかし、この問題はこれで終わらないんです。被差別部落の人は怖いのかと、純粹じゃないのかと、そういうことを、あの記事を見た人はイメージとして植え付けられる可能性が極めて高いと思います。そのことについて、部落解放同盟としても、この問題まだ終わっていないとして、朝日新聞社に対して働きかけをしています。

いつつめは、大阪市の公募区長論文差別事件です。現在、大阪市の24区長のうち、多くの区長は公募制で選ばれています。選んだのは、橋下市長ほか数名の方が論文選考や面接をして選んでいます。東淀川区長の公募で出された論文のなかに、東淀川区には三つの同和地区がある。だから、イメージが悪いんだというようなことを書いた人が都島区長として選ばれました。しかも、この論文がそのまま大阪市のホームページに掲載されてしまった。後日、部落解放同盟大阪府連との確認会の中で分かったことですが、これは問題だと大阪市もわかっていたにもかかわらず、ホームページに載ってしまったり、ホームページを見て、これはおかしいという指摘があると、すぐに説明もなくそれを削除したりとか、そういうことが起こっていました。先日、私もその糾弾会に行ってきたんですけど、その論文を書いた区長は、部落差別の問題について、ほとんど知らなかったと言います。インターネットで調べたり、その地域を歩いて何人かの人から聞いた情報をもとに、論文を書いたらいいんです。ただ、その区長は、自分ではイメージが暗いとは思いませんでしたと言っていました。それなのに論文の中で被差別部落をネガティブに書くというのは、大変矛盾しています。解放同盟の側から、区長の中に差別意識があったからではないかという質問に対しては、自分には差別意識はなかったと言いました。

もっと身近な話で言うと、たとえば住吉小学校の先生も、今日、来ていただいています。保育所の親同士の話の中で、どこの小学校に行かせるかという話で、「住吉小学校は行かせたくない」という会話がいまでもあるんです。なぜなら、「同推校(旧・同和教育推進校)」だからというんです。こういうところを、私たちは、きちっとわかってないといけないと思っています。

こういう状態の中で、どういうふうになり向かったらいいのか。ひとつは糾弾です。全国水平社がいちばん力を入れてやってきたことです。私も何回か糾弾会に参加してきました。何も知らないときは、「エイ、みんな、怒ってるなあ」「ちょっと、怖いなあ」という気持ちが私の中にもありました。けれども、糾弾会というのは怖いだけではない。何を怒ってるのかということがわかったら、なるほどと思うこともあるんです。相手側が、自分自身の持つ差別性に気がついて、変わろうとする、このことが大事なんだと思います。ふたつめは、法整備です。差別を禁止したり、差別された人を救うという法整備が、今の日本にはありません。みつめは、安心して相談できたり、参加できたりする場が必要です。これは地元で、今ま

でもやってきたんですが、もっと力を入れていかないといけないだろうと思います。よつつめは、(特に、子どもや若者に)部落出身であるということを自覚し、誇りを持たせるということです。今までは、青少年会館で、狭山事件などに取り組む中で、自覚をさせると同時に誇りを持たせるようにしてきてたんですけど、青少年会館がなくなった今、このことをどこでやるんだという問題があります。たとえば、小学校や中学校、地元でもやらないといかん、だけど、お父ちゃん、お母ちゃん、お祖父ちゃん、お祖母ちゃんが、部落問題について話せるんだしたら、ちょっとでも、子や孫と話してあげることが大事だと思います。いつつめは、人権教育、人権啓発の推進です。地元でもしていますが、たとえば、住吉支部でやっているのは、小さいことかもしれないけども、「解放だより」という機関紙を毎週発行しています。その「解放だより」を地区内に全戸配布しているんです。それで、今の部落問題はどうなっているんだということを見ていただく。また、住吉・住之江同和教育推進協議会で、学校の教職員の方、PTAの方に対する啓発活動も行っています。こういうことも大事にしていきたいと思っています。反差別の立場に立つさまざまな人や組織の連帯も、これから大事にしていきたいと思っています。

今日お話ししたい2点目は、人権のまちづくり運動を推進していかないといけないということです。市民交流センターの存続の問題、学校選択制の問題は、特に重要な問題です。大阪市の人権施策が後退してきているなかで、私たちは、言うべきことは言って、あきらめずに闘っていきたくと思っています。以前、連続講座に出てきていただいた谷元昭信さんの話にありましたが、地域の福祉運動とか教育運動とか、就労支援とか、そういった具体的な課題を通して、さまざまな人々が結び合うネットワーク運動、これをつくっていくべきだと思っています。また、こういうことも言われていました。無知と無関心が呼び起こす差別・偏見を、知り合い、繋がり合う関係の中で克服していく協働の場づくり、こういう運動をしていかないといけない。無関心ということでは、住吉の住宅でも一般募集で地域の外側から入ってきて住んでいる方が増えてきています。そのうちの何人かの人と話をしたんです。印象的だったのが、一人の方が、ここに住む前は実は(被差別部落に対して)偏見を持っていましたと言われました。外では、偏見をもって普通に話がされます。知らない、そうなんかなあと思ってしまいます。けれども、ここに住んで、いろいろな行事に参加したり、差別をなくしていこうと一生懸命取り組んでいる人を見て、私が思っていたこととは違うなあということがわかりました。今後、部落差

別の問題を勉強していきたいと言ってくれました。こういうことを大事にしていけないかと思いました。

3点目は、人と組織を育てていくということです。部落出身者だけではなく、部落に住むようになった人、部落関係者—ここに住んでなくてもここで働いている人—も、ここで住んでいること働いていることに対して、良かったと思ってほしいし、自信と誇りをもってほしい。そのためにも、自己実現を応援していくことが重要です。ただし、これまでのように、運動に参加すれば仕事が保障されるという時代ではありません。だけど、自分自身が何になりたいのか、その夢とか目標を見つけることが難しい。見つけることができる、それに向かって努力することができる、そのために自分は何ができるのかって考えないとだめだと思っています。今日も、餅つき大会をやりましたが、地域とか社会に貢献すること、そのことが喜びに変わるような、そういうことを伝えていかないといかんのかなあと思います。そして、自分自身がどんな生き方や行動をしていくのか、それが運動の魅力を伝えていくことになるのではないかと思います。

最後に、水平社の90年ということなので、少しこじつけではありますが、水平社宣言を引用してまとめとします。水平社宣言というのも初めての方もいらっしゃるかもしれませんが、1922(大正11)年3月3日に全国水平社ができたんですけど、創立大会の宣言です。それを略して水平社宣言と呼んでいます。そのなかで、三か所を引用しました。ひとつめは、「人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動」の部分です。この中には、人間には誰にでも可能性があるんだということが書かれています。もう一つは、私の祖父も書いていたんですけども、自主解放という精神を忘れてはいけないということです。ふたつめは、「エタである事を誇り得る時が来たのだ」の部分です。今は、差別も見えにくくなってきているし、もう言わなくてもいいのではという風潮も強まっていますが、いまだからこそ、このことをもう一度、噛みしめていかなければいけないと思っています。最後は、「卑屈なる言葉と怯懦なる行為によって、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ」をいう部分です。これは自分自身もそうですが、まず、自分の中にある差別性に気づくことから始まるのではないかと

思っています。さきほど、砂子さんも言われてましたが、部落差別は部落の者でないとわからないと言ってしまったら、そこで関係性ができなくなります。自分はどうなんだ、と言われたときに、自分の中に、たとえば女性を下に見ていたり、障害者をバカにしていたり、することがあると思うんです。そういう自分自身の中の差別性について考えてみるのが大事だと思います。それを克服しようとする姿勢が自分自身の成長とか、周りの人との信頼関係に繋がっていくと思います。人と人との関係性が部落差別の解決につながると思っています。

村田望

今まで5人のお話を聞きましたが、もう少し、ここが聞きたいとか、ここはどうなっているのかというような質問、意見があれば、おっしゃってください。これからは質疑応答で進めたいと思います。

#### 質疑応答

(会場から)Mさん

村田進さんのおっしゃったことについて。私自身、地域の中での就労支援、若年者における雇用の価値観であるとか雇用問題で、この10年取り組んできたんですが、これは解放運動とは別の分野でもあると思いますが、今までは、地域と運動がリンクしていた部分があると思いますが、社会情勢であったりとか、これからの問題というのを、もう少し包含するようなかたちで、運動の形態を進めていく、そのひとつが「めざす会」とか、昔でいう、要求者組合の発展型、今までは優先雇用ありきの組合だったんですが、そうじゃなくて、いわゆる職業体験会とか、というような発展形を目指すようなグループ化、あるいは支援化という部分で、解放運動のこれから先があるのかなあと聞いていました。私自身、松原の地域出身で、地元では今でもありますが、今は牛肉処理場と言わなければいけないと思いますが、昔は「屠場」と呼ばれていましたが、いわゆる地場産業と言われるものがありました。大阪市内の地場産業というのは、今は福祉になりつつあるのかなあと思っています。そこらをしっかり地域として、次は地域の中に向けたかたちでの、職場の魅力であったり、将来、法人で働きたいなあとか、福祉の面でどういう仕事があるのかなあと、興味がわいてくるような取り組みというものも必要です。そこには資格や経験が必要になってきます。そういう部分で、今後、ライフサポート協会あるいは診療所、財団と連携していければと思っています。

(パネラー) 梶川田鶴子さん

今日、私はつくづく感じたんですが、うちの子どもが餅つきで、「地域の人が少ない」って言ったんです。手伝ってもらえる中学生とか、ヘルパーさんとか、ケアマネとか、輪が広がってる。行事をすることによって、少しはお金がかかるけども、これがいいなあとつくづく感じています。男の人も女の人も、どなたでも手伝ってくれています。私は親戚が30人ほどいますが、一つのものでも分けて食べると、親戚の団結が強いんです。だから、一つのものでも分け合っ食べられるような体制になってほしいなあ、今日は感じました。

(パネラー) 西村隆英さん

書記長から人を育てようという話が出ていましたが、自分の体験を少しお話をさせていただきたいと思います。水平社宣言の中に「エタである事を誇り得る時が来たのだ」とありますが、このアイデンティティが育たないと、自己実現にはいかないと思います。自分自身の立ち位置というのが定まらなと、ここにはいかない。今までも、いろんな活動家の方や老人会で活動されている方も、ここを見つけた。だから、老人になっても、はっきり運動をやる。行政から同和対策を切られても、運動をするというのはここですよ。自分の立ち位置を決められた。

私自身は、立ち位置が決まってきたのは中学2年でした。東大阪から転校した友だち、彼は荒本の近所に住んでみたいですけど、あるとき、「荒本はすごい怖いところや」って言ったんです。当時、私は住之江区に住んでまして、住之江の地区は40人ぐらいしか住んでなくて、学校で相談できる人がいませんでした。一週間ぐらい悩みました。自分が部落出身と言ったら、友だちをなくすやろうと。でも、このことを言わないと、自分が自分でなくなる。自分を卑下することになる。それで、言いました。そのときに「ごめん」って言ってくれたんです。その一言があったので、そこから、運動は続けていけました。部落で生まれたというのは、自分の中では損だと思ってました。大学に入ってから、在日外国人の同級生が、親が二人とも不法入国で、強制送還される。彼女は、日本で生まれて日本で育って、高校を出て、就職したんです。彼女が強制送還をされるのを止めようということで運動をしました。そのときに、高校のクラスの中には、「自分には関係ない」という意見が何人か返ってきたんです。そのときに考えたのは、自分が被差別部落に生まれたから、その被差別の立場のことが感じられるんだと。今までは、部落出身ということ

マイナスにとらえていましたが、部落出身だからこそ、被差別の人の立場がわかるんだと思い、マイナスや弱点としてとらえることをやめました。厳しい立場に置かれている人の思いをわかる強みとして、とらえることができる。そう思うことで、はじめて、自分は部落に生まれてよかったんだなあ、アイデンティティがそこで芽生えた。私が書記次長や地区協事務局長であったとき、高校生・専門学校生・大学生の合宿を毎年していました。ある年に、参加体験型人権学習をした後、雑談から部落出身だということを行うか言わないかという話が自然に始まったんです。そのなかで、言うという子は言う理由を言え、言わない子は言わない子で理由が言えた。そのときは、言わないといけない、というふうに押さえつけたりしなかったので、自分の立場をそれぞれ言えた。そのことがすごく大事なんです。そういう意味で、自分のことを強みとして、「エタである事を誇り得る時が来たのだ」、そう思えるところに立つということと呼ばけなり、取り組みをする。本人自身をエンパワメントさせるような取り組みが大事だと思います。

(会場から) Oさん

先日、生野のコリアンタウンに行きまして、高校の同級生と会いました。そのうち二人は、在朝の人でした。キムさんとパクさんです。キムさんは、3月まで大阪市の小学校の教員で、講演もされています。なぜ、20数年ぶりに会ったかという、キムさんが私に会いたいということでした。なぜかという、高校2年のときに、教室で私は部落民宣言をしました。そのときに、キムさんが本名を名乗っていません。そこで、なぜと思ったけども、やっぱり言えなかった。これではダメだということで30歳で教員になったそうです。あの時の一瞬が自分を変えたんだと思っていたそうです。そんなことで、やっぱり影響があるんだなあ。今後の解放運動は、昔は法律がなくても、そこでやってたんだと。自分の方向は自分で決めてきた。法律によっていい面もあるけど、初心に帰るといのが大事ななあと思います。

(会場から) Sさん

68歳の独居老人です。部落民としての自覚、これは子どもたちの世代ではどうなっているのかということを考えながら聞かせていただきました。私は子どもが8人いますが、2人はアメリカで、3人が東京で、1人が名古屋で、1人が神戸で、住吉にいるのは1人だけです。そうすると、ほかの子どもたちは部落の話は出ません。子どもたちの感想としては、関西から来てる、あるいは同和教育、解放教育の経験がある人

の場合は、マイナスの印象もあるけど、やっぱり認識が違うっていうんです。まったくそういうことを知らないで来ている人の場合は、2ちゃんねる・レベルみたいな、無知と偏見がすごいって言うんですね。だから、解放教育というのは、いろいろ批判もあるけども、取り組まれていた所は、何を誤解しているのか、何に憤りを感じているのか、というののすぐに話せるからいいんだけど、全然知らないで来た人、それこそ同和という言葉も知らない、「童話」という言葉と混乱しているようなレベルの人はいっぱいいる。そういうなかで、部落問題がどういうふう認識されているのかというと、差別意識と無自覚なんだけども、広げていくみたいなの。私の子どもが部落民だということを知らないから、「部落ってすごい所らしいね」「雨の日になると、ドロドロになるそうじゃないですか」とか、20代でも信じ込んでる人もいる。「そんなことはない」ってうちの子が言うと、「なんでそんなことを知ってるの？」とびっくりされる。「オレ、そこで生まれて、そこで住んでたから」って。「そんなふうには、この頃、部落民カミングアウトばかりしてるわ」って言ってます。カミングアウトも、糾弾とかそういうかたちではなくて、「それは違いますよ」って、スツと言うカミングアウトが大事なんじゃないか、その後の関係も含めて。そうやって、人は、今この仲間の中に、いわゆる部落の人はいないだろうという前提で話す。となると、安心して、好き勝手に言う。自分は、部落出身者だから、それをフンフンって聞いているわけにはいかないから、「それは違いますよ」「私はそこで生まれましたから」って言うと、周りは、目が点になる。二の句が継げない。だけど、そこでカミングアウトするというのは大事だと、家でするんですね。

ここで、私は、講習の一つとして、英会話の授業を担当させてもらっているんですが、その受講生と食事をしたり、お茶をしたりする機会があって、その中で一人の彼女が、市民交流センターの職員が、ここで生まれて育った人だから、いろいろ融通を利かせてもらえると言うんです。どういうことかということ、ここで生まれ育った人だと地域の状況をじつによく知っているの、自分が知らないことでも、他の人に聞いてくれたりする。これが、まったく外の人だったら、融通が利かない。これって大事なんだなあって思ったと言うんです。それを聞いて、見る人は見てくれてるんだなあって。長所を見てくれてるっていうのは、ありがたいことだと思って、嬉しかったんですが、逆に、そういうじゃないことも聞くわけです。たとえば、職員さんが住田さんと話すときと、私らと話すときの職員の態度が違いますって言うんです。どう違うのか聞くと、やっぱり、部落外の人に話しているときのほう

が、そっけないし、事務的に聞こえるって。たまたまかもしれないけど、そういうふうに見てる人もいます。でも、最初に言った人みたいに、ここの良さを知っている人が増えてきているのは、私は嬉しいと思いました。ですから、子どもの実家として、ふるさととして、ここがずっとあるというのは、あらためて自分の誇りに思います。来年で、ここに来て40年になりますが、ほんとうに良かったなあとあらためて感じています。

(会場から)Tさん

中学の学校の教員です。今日、子どもらにボランティアに行かないかって言って、来たんですが、地区の子もいれば、地区外の子もいっぱいいて、ボランティアに行って、人の役に立つのはいいだろ、っていうのも当然あるんですが、地区の子には、ここで生まれて、どう生きていくのかということをもっともっと子どもらとしゃべりたいなあって、そのことを話すきっかけになるやろうなあと。地区外の子は、自分の親とか、上の世代から、いろいろ言われてることが、ホンマはどやねん、っていうふうなことを、自分の目で、あるいは人と出会う中で、気づいていってくれるきっかけになったらなあと思いがあります。学校でも、若い人がどんどん教員になってきて、ちゃんと同和教育に出会ってない、部落って何ですかって言う教員が、大阪の中でも結構いてるんです。

この間、村田望さんはじめ何人かの人に来てもらって、私はこういうふうな解放運動を大事にしようと思って生きてきたという話を、若い教員に聞いてもらっています。また生徒たちにもこの話をしてもらいます。そうすると、そのなかで心を揺さぶられる子どもがいて、自分は住吉の部落の子として……、という子どもが出てくる。お母さんも話をしてくれて、私が子どものときは解放子ども会、こんなんでっていう話をしてくれて、親としてどう子どもに伝えていったらいいのか悩んでるという40代ぐらいのお母さんもいました。

学校の教員としては、そういう思いを持っている親世代、子どもら、この子ら、どこでどうやって生きていくのか、自分が主体的にどう生きるのかということ、部落の子は部落の子として、同じ場にいる部落につながりのない子も共に生きる、っていうところで、自分も当事者違うのか、というところで立ってほしいなあという願いを持っています。時代もどんどん変わって行って、市長さんがどう考えるのかによって、教育の中身もどんどん変わるんやけど、そういうことを大事にしたいと思っている教員もたくさんいるし、い

ろんなところで、連帯して、やっていきたいなあという願いを持っています。

村田望

参加者の皆さんからそれぞれ大切な発言、ありがとうございました。時間の関係もありますので、ここで、パネラーに皆さんから順次まとめの一言をいただきたいと思います。

#### パネラーのまとめ

梶川

子どもも大人も、部落がなぜできたかという歴史を知らないとお母さんも子どもに言って聞かされないから、一番大事なことは、部落がなんでできたか……、行政がつくったもん、私らがつくったものと違う、これを孫に言って聞かせることが大切だと思います。

西村

部落の人は部落の人のアイデンティティ、そうでない人はそれなりのアイデンティティもあると思いますので、これからの解放運動として、部落出身ということを生きていくこれからの糧にする、これをアイデンティティとして、持っていていただくというのが、これからの解放運動につながるのではないかと、ということを再度訴えたいと思います。

村田

さきほど、差別は人と人の関係性の問題というふうに言われたんですが、地域ということを見ると、同和地区と周りの地区との関係の接点の所で問題が起きます。排除したり、ぶつかったりすることが起こる。それが差別として現れる。そういう意味では、取り組み方は二つあって、一つは、外の地域の見方が変わる。同じ住民として見れるかどうか。受け止めることができるかどうか、つまり外の啓発、意識改革がいります。同時に、中は中で、さきほど、自覚とかアイデンティティとか言われましたが、自分たちを卑下するのではなく、自分たちの暮らしに誇りを持って、自分らしく生きていこうという、そういう地域の中の意識改革、この二つが思うんです。福祉法人も解放運動をやってます。医療法人もやってる。外で公務員で働いてる人も、外で解放運動をやっているんです。そういう力を最大限使いながら、外に対する影響力を最大限使いながら、同時に、一番大事なことは、地区内の自覚なんです。部落民としての自覚をどう涵養するかということです。それは解放同盟し

かないんですよ。だから、解放同盟は、まず地域の中の痛んでる、または問題を抱えてる人に寄り添う、その先頭を走ってほしい、一人ひとりから始めてほしいということを改めてお願いしたいと思います。私も含めて。

砂子

私は、1984年から20年間、住吉小学校で教員をしていて、出てから9年になります。住吉小中の連携の窓口をしたり、今も教育共闘で住吉に関わって、ということは29年、人生の半分は住吉に関わっているから、住吉の関係者ですつというふうにご自己紹介してもいいかなあと思っています。それから、独居老人の仲間にも、もうすぐ入ると思いますし、そのときは村田さんの所にもお世話になるかもわかりません。肩書きとしては、教職員組合なんですけど、組合といっても、教職に身を置く身ですから、教育が一番大事で、子どもが一番大事です。教員が怖いのは、洗脳されやすいんです。戦前は、お国のためって洗脳させてきました。だから、これから気をつけなかったら、国防軍とかいう話も出てきている中で、また同和教育が薄れてきている時期が危険だから、そのなかで言い続けられる教員でなかったらいかん、それが運動やなあと思っています。ということで、これからは住吉の関係者やと名乗っていきたく思います。

友永健吾

今日は私自身も大変勉強になりました。それをこれからの住吉の解放運動に生かしていきたいと思っています。みなさんも、今日、聞いたことなかでわからなかったこともあると思いますのが、それが始まって、さらにもう一歩も二歩も深めることができると思います。今日は、そのきっかけにさせていただければと思います。何か、次のステップにつなげていただければと思います。こういう場では、いいことばかり話してしまいますけども、私自身も恥ずかしいことや言いにくいこともあります。そんな自分でも、気づいて、前話ができる、これが運動の魅力じゃないかなあと思っています。これからも、よろしく願います。

村田望

パネラーの皆さん、参加者の皆さん、積極的なご発言、ありがとうございました。本日のパネルトークで、これからの住吉の解放運動の方向が、かなり明らかにされたのではないかと思います。不慣れた進行役でしたが、これで進行役を終えたいと思います。

## 閉会のあいさつ

前田秀男支部長 どうも、みなさん、ご苦労様でした。これからの運動という所で話をさせていただきました。今日は支部員だけじゃあなしに、いろんな繋がりの中で参加していただいています。差別のない、平等に生きれる社会を目指して、われわれは運動をしています。私自身も差別をすることもありますが、ただ、人というのは変革できるし、そのときのどう変わっていくか、そのことが大事なんです。知ったあとに、そのことからどう変わっていいのか、解放運動の中で気付いたことをどう変えていけるか。職場の中で、地域のつながりの中で気付いたことをどう発展させるのか、そこが今後の解放運動の在り方ではないかなと思います。形あるものは壊れます。ですが、新しいものをつくっていく、時代の中で変化はある、でも、大事にしていかないといけないものはあると思います。

いま、解放運動にとって、人権問題にとって、人権教育にとって、非常に厳しい状況にあります。でも、50年前にこういう状況はなかったんです。つくり上げる中で変化してきています。ですから、よりよいものをつくり上げていくために、変化させていくということを解放同盟は求めていきたいと思っておりますので、今後とも、皆さんの力をいただけるような、このような学習会も設定させていただきたいと思っておりますし、また、いろんな声を職場で、地域で出していただき、解放同盟のほうに意見をいただいたら、運動の前進につながると思います。よろしく願います。

## 市民交流センターすみよし 北をめぐると動き

### 「人権のまちづくりを考える」講座 特別記念講演

#### 内容

格差拡大や新たな貧困が重大な問題となっている日本の現状を見た時、地域を拠点に個人、団体、企業などが「人権尊重」を基軸にまちづくりに取り組むことが決定的に重要です。そのさいには、防災、住環境、福祉、教育、就労など、総合的な視点を持つことが必要です。地域での取り組みを基本にしながら、自治体や国の制度を効果的に活用していく必要があります。

今回は、もと内閣府参与としても活躍されていた湯浅誠さんをお招きして、「人権のまちづくり」について講演をいただきます。

日 程 4月28日(日)【全1回】  
時 間 13:30～15:30  
定 員 200名  
費 用 500円(資料代)  
講 師 湯浅 誠さん(社会活動家)  
申込締切 4月21日(日)

#### 「講師プロフィール」

反貧困ネットワーク事務局長、NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事。90年代より野宿者(ホームレス)支援に携わる。2008～09年年末年始の「年越し派遣村」では村長を務める。2009年から通算2年間、内閣府参与。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。1969年生。著書に『反貧困』(岩波新書、2008年、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞大賞、第8回大仏次郎論壇賞)、『どんとこい! 貧困』(イーストプレス「よりみちパン!セ」シリーズ、2009年6月刊)、最新刊に『ヒーローを待たせても世界は変わらない』(朝日新聞出版、2012年)。2012年中は大阪でも活動を行う(団体名AIBO)。

## 「住吉部落歴史研究会」 学習会のご案内

拝啓、時下益々ご健勝のことと推察申し上げます。日ごろの部落差別をはじめ一切の差別のない社会の確立にむけた取り組みに心より敬意を表します。さて、表題の毎年取り組まれている「住吉部落歴史研究会」学習会を下記の要領で行いますので、公私、何かと御多忙のところ誠に恐縮に存じますが、是非とも、ご出席を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

#### 記

日 時 3月21日(木) 午後7時より  
場 所 市民交流センターすみよし北 201室  
内 容 環境改善前の住吉地区の実態について  
～「キタキ」を中心に～  
報告者 森本初美さん、宮崎礼子さん  
川口隆男さん、小住光さん

#### 申込・問い合わせ先

公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
電話 06-6674-3732  
担当:前田まで